

令和5年度

一般入学試験

国語

時間：50分
満点：100点

受験についての注意

- 1 試験開始の合図があるまで、問題用紙を開かないでください。
- 2 問題用紙は11ページ、問題は一～三まであります。
- 3 開始の合図があったら、まず解答用紙に氏名と受験番号を記入し、受験番号を記入例にしたがってマークしてください。
- 4 試験中、問題用紙の印刷が見えにくい、または文章等で不明な点がある場合は、手をあげて監督者に知らせてください。ただし、問題に関する質問には、いっさいお答えできません。
- 5 各問題とも、解答は解答用紙（別紙）の所定欄に記入してください。
- 6 終了の合図があったら、ただちに筆記用具を置き、監督者の指示にしたがってください。
- 7 解答用紙だけ回収します。問題用紙は持ち帰ってください。

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

アルバイト労働者だけでなく、正規労働者の権利もまた、日本では十分に守られているとは言えない状況にあります。正規の職員でも年次有給休暇なんかほとんど取ったことがないという人は大勢います。それどころか、残業しても賃金が払われないサービスクラス残業や、休日のサービスクラス出勤、一週間あたりの労働時間は法律でキセイ^Aされているにもかかわらず、それを大幅に超えて働いている、^B、なんの落ち度もないのに突然解雇通告されるなど、法律で禁止されているはずのことが現実社会では頻繁^{ひんぱん}に起きています。

① そういった労働環境が原因となつて起こる一番ひどいジタイ^Bが「過労死」やリストラなどを苦にした「自殺」です。どうして死ぬまで働いてしまうのでしょうか。

日本で過労死の研究をしている学者が、国際的な会合で、他国の過労死対策について質問したところ、逆にあれこれ質問されて困ったという体験を新聞かなにかの記事で読んだ記憶があります。

「なぜ死ぬまで働くのか?」「日本には有給休暇の制度はないのか?」「疲れたら休めばいいのではないか?」「矢継ぎ^{やつぎ}早に繰り出される質問は、考えればもつともなものばかりだったということです。

労働の最大の目的は、賃金を得て自分が幸せに生きることです。働くことが死につながるのではまったく意味がありません。

日本の労働者は、もつと権利を使うことに積極的になっていいのではないのでしょうか。有給休暇をつかって気分転換したり、心身が疲れたら休んだりすればいいのです。そのほうが仕事の能率も、モチベーションもあがると思います。ところがそうさせない空気が日本の多くの職場にはまだまだ残っているのです。

過労死には、脳・心臓疾患^Cによるものと過労自殺によるものの二種類があります。脳・心臓疾患による過労死は、疲労が命に関わるような身体症状として表れた結果であり、過労自殺は、疲労が命に関わるような精神症状として表れた結果です。

^B、過労は人間の身体もしくはは精神を蝕^{むしば}み、正常な状態ではいられなくさせるものなのです。もちろん、過労死の背景には、過労死まではいかず一命は取り留めたものの、重度の障害が残ってしまった人や、重度の障害とまではいかななくても、社会復帰が困難な状況に追いやられてしまった人などが、過労死した人の何倍、何十倍と存在します。

過労死が認定されるためにはいくつかの基準があるのですが、最も重要なのが当然ながら残業時間の長さです。厚生労働省が発表しているデータを見ると、過労死した人の中には、一カ月に一〇〇時間以上とか一四〇時間以上などの残業時間だった人が何人もいます。一週間の労働時間の基準は一日八時間で土日が休みだと四〇時間になります。その働き方では一カ月の労働時間は一六〇〜一八〇時間くらいです。それプラス一〇〇時間とか一四〇時間というのは、ひとつの会社でフルタイムの仕事をしたあと、休みもなくもうひとつフルタイムの仕事

をしているような状態に近いのです。

この人たちの毎日の睡眠時間や休憩時間は、いったいどれくらいだったのでしょうか。日々の楽しみもなく、仕事仕事ばかりで毎日が過ぎてゆくような生活というのは、本末転倒です。何度も言いますが、わたしたちは生活のために働くのであって、仕事のために生きているわけではないのです。

ここ数年間の日本における過労死認定請求件数は四五〇〇〜四九〇〇件ほどで、そのうち認定されているのが一九〇〇〜二二〇〇件程度です。開発途上国などでも過労死する人はけっこう多いようですが、先進国でこれほど大勢の過労死があるのは非常にメズラしいことらしく、日本で労働基準法が守られていないことよりの証拠だと言う人もいます。

日本には、過労死する人や労働が原因で体を壊してしまう人がたくさんいる一方で、働く意欲があるのに仕事がなく、失業者となって苦しい生活を強いられている人も大勢います。日本というひとつの国の中に、仕事を抱えすぎている人と働きたくても仕事がない人、過労死者と失業者が同居しているのです。

社会的コストという面から考えると、過労死も失業も非常に高コストだという分析ができます。過労死の背景には必ず「ゆとりのない労働環境」があります。ほとんどの人が余裕のない働き方をしているわけで、それが大量の病人を生み、結果として医療費を押し上げています。また、失業者が大勢出ると、生活保護をはじめ失業対策などにもたくさん費用がかかります。これらにはともに多額の税金が投入されています。その税金は労働者の納税によってまかなわれているわけです。過労死や失業者が増える社会は、働ける人がその分の費用を捻出するた^Eめに余計に働かなければならない社会ということであり、それは過労死をますます増やしてゆく構造でしかありません。まさに悪循環^③です。

つまり、過労死する人が抱えすぎている仕事を失業している人に回せば、過労死も防げるし失業対策にもなるし、税金の節約にもなるのです。「働くということはお互いさまである」「労働とは社会参加である」という意識が回復すれば、過労死者や失業者は減ってゆくことでしょう。

そのためには、一人ひとりが「何のために働くのか」ということをよく考え、労働と生活のバランスを良好に保つ必要があります。それがいま盛んに言われている「ワークライフバランス」ということなのですが、「個人個人のお金の稼ぎ方と使い方のバランスを上手にコントロールしましょう」というような狭い視野に立った考え方をしているうちは、日本の社会はいつまでも安心して暮らせる社会にはなりません。

ワークライフバランスの考え方の基本に、「一人ひとりが社会の中の一員としての役割を果たしてゆける社会にしてゆこう」という共通理解が必要です。ですから、たとえ年間に一日しかなくとも、アルバイトがきちんと有給休暇を消化できるように社会にしてゆくことが大切なのです。現実にはすぐにうまく行かない部分もあるかもしれませんが、次の世代を作っていくみなさんには、ぜひとも頭の片隅に入れておいて欲しい感覚です。

みよみの ただはる
南野忠晴『正しいパンツのたたみ方』 一部略より

問一 二重傍線部A～Eのカタカナは漢字に直し、漢字には読みがなを「ひらがな」で書きなさい。

問二 空欄部 [A]・[B] に入る語の組み合わせとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア A それによって B 要するに
イ A あるいは B つまり
ウ A または B にもかかわらず
エ A もちろん B したがって

問三 傍線部①「どうして死ぬまで働いてしまうのでしょうか」とあるが、筆者はその理由をどのように考えているか。「権利」「空気」という語句を用いて、六十五字以内で答えなさい。

問四 傍線部②「生活のために働く」とあるが、これと同じ内容を述べた一文を本文中から抜き出し、その初めと終わりの各五字を答えなさい (句読点を含む)。

問五 傍線部③「悪循環」とあるが、どういうことか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 過労死も失業も非常に多くの税金が必要になる社会的コストの高い現象だが、このコストを押し下げするためには、働ける人が今以上に働く必要が出てくるため、結果として過労死が増えざるをえないということ。
イ 過労死は、病人を大量に生むような労働環境を背景としており、税金を投じてこうした状況を改善する必要があるが、それには働ける人が今以上に働いて税金を納めなければならず、結局過労死は増えていくことになるということ。
ウ 過労死と失業を同時に解決するために、働きすぎている人の労働を働けない人に回したとしても、企業は余裕ができた人にはその分働かせようとするので、結局は過労死の数を減らすことにはならないということ。
エ 過労死の背景にある過酷な労働環境は、多くの病人を生んで医療費を押し上げることになるが、その医療費をまかなうためには働ける人たちに過酷な労働を強いることになり、結果的にまた過労死が増えてしまうということ。

問六 傍線部④「安心して暮らせる社会」とあるが、その実現のためにはどのようなことが必要だと筆者は考えているか。最も適当なものを

次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一人ひとりが労働を通して自己実現を達成できるように、個人で仕事を抱え込むのではなく、有給休暇を積極的にとって職場全体で仕事を分け合おうという共通理解があること。

イ 個人個人の労働と生活のバランスを良好に保とうとするだけでなく、社会を構成する一人ひとりが役割を果たしていけるような社会にしていこうという共通理解があること。

ウ ワークライフバランスを個人個人のお金の稼ぎ方と使い方に限定して考えるのではなく、社会全体のお金の稼ぎ方と使い方と関連させて考えようという共通理解があること。

エ 仕事の偏りをなくし、助け合って働くことができるようにするためにも、社会を構成する一人ひとりのワークライフバランスを積極的に管理していこうという共通理解があること。

問七 本文の内容と一致しているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 過労死の認定に最も重視されるのが残業時間だが、日本では残業をしても賃金が支払われない場合がかなりあるのが現状である。

イ 過労死の背景には、過労死とまでは認められなかった事例が、認められた事例の何十倍も存在することを忘れてはならない。

ウ 正規労働者の権利を守るためには、まずアルバイト労働者が有給休暇を積極的に消化できるようにすることが重要である。

エ 日本は先進国では例外的に過労死の多い国だが、他国で過労死が少ないのは労働に関する法令が厳しく守られているためである。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(これまでのあらすじ)「わたし」は二十六歳の女性で、都会で一人暮らしをしながら出版社に勤め、本の編集の仕事をしている。仕事でなかなか成果を上げることができていない「わたし」は、本当に作りたい本を作ろうと、小説家の涼元(すずもと)に作品の執筆を依頼したが、断られてしまう。その夜、自宅であるワンルームマンションの部屋に戻った「わたし」は、故郷から送られてきた野菜を使った鍋を作って食べている。部屋には野菜とともに送られてきた、父母と幼稚園時代の「わたし」の三人が写った家族写真が飾られている。父はすでに亡くなり、母は実家で一人暮らしをしている。

小鍋を食べ終えたわたしは、傍の目覚まし時計を見た。

時刻は午後八時を少しすぎたところだった。

きつと母も夕食を終えた頃だろう――。

そう思って、わたしは数日ぶりに母に電話をかけた。

四コール待って「もしもし」という、わたしよりもハイトーンな声が聞こえてきた。母は今年でちょうど五〇歳になるけれど、見た目も、声も、ずいぶんと若くて綺麗な人(きれいなひと)なのだ。

「あ、もしもし、わたし」

「あら。もう夕飯は食べたの？」

「食べたよ。と言っても、送ってもらった野菜を切って鍋にしたらただけだね。めっちゃ美味しかったよ」

「あの葱(ねぎ)、すごく甘かったでしょ？」

「うん。噛むと、なかがとろつとして甘かった」

いつものように、わたしと母はタアイのない会話をはじめた。そして、これもいつものように(少しずつだけれど)、わたしの身体の隅々にへばり付いていた「こわばり」のようなものが剥(は)がれ落ち(お)ちていく気がするのだった。

いつもと違うのは、時々、母が咳(せ)き込むことだった。

「なに、風邪(かぜ)ひいたの？」

「うーん、ちよつとね。でも、大丈夫」

「熱(あつ)は？」

わたしが心配しているのに、母はさらりと話題をそらす。

「大丈夫だってば。それよりね、今日、職場のお友達に仔犬を一匹もらってくれないかって相談されたんだけど」

「仔犬？」

①「そう。でも、どうしようかなあって、……」

「飼うの、大変じゃない？」

「そうなのよねえ。生き物を飼うってことは、責任が伴うってことだし」

母はそう言うけれど、わたしとしては責任うんぬんではなくて、とにかくいまの母には少しゆっくりして欲しいのだった。自分以外の誰かのために尽くすのはもう充分だから、そろそろ自分の人生を楽しむために時間を費やしてもらいたい。

「犬を飼ったら、散歩とか、ご飯とか、しつけとか、あれこれ大変になると思うよ」

「うーん、そうよねえ。でも仔犬って、可愛いのよ」

そう言って、母はまた少し咳き込んだ。痰がカラんだような、ちょっと嫌な咳だ。

②「可愛いのは分かるけど——」

わたしは、そこで言葉を止めた。

もしかすると、いまの母は楽しむ「時間」よりも、淋しさを埋めてくれる「存在」を欲しているのかも知れないと思ったからだ。

職場の人が母に仔犬を勧めたのは、母が淋しそうに見えたからではないか……。

わたしは、仔犬を抱いた母を想像してみた。幸せそうに笑っている顔もイメージできる一方、仔犬の世話で疲れてしまった顔も思い浮かぶ。

父が事故に遭い、寝たきりになったとき、母はヘルパーさんを雇いながら自宅での介護をスタートさせた。もちろん、わたしも出来ることはしたつもりだ。しかし、何をしても反応のない夫への献身は、母の心身にじわじわとダメージをチクセキさせた。母の顔は日増しにやつれてきて、ちやうど二年が過ぎた頃、ついに心が崩壊してしまった。わたしが実家に帰ったとき、母はベッドで寝ている父の脛のあたりに顔を埋めながら嗚咽していたのだ。そんな母を見たわたしも、母に抱きつきながら号泣してしまった。

人生に疲れ切った母は、わたしの勧めもあって父を施設に入れた。しかし、その後の六年間も、母は毎日のように施設に通い、出来る限りの介護を続けた。女手一つでわたしを養うだけでも大変なはずなのに。

心根がまじめすぎる母は、夫を自宅で介護してやれないことにたいして自責の念を抱いているように見えた。わたしは、何よりそのことが心配だった。また、母の心が壊れてしまうのではないかと——。

③そして先月、ようやく母は介護という枷から放たれた。

八年ぶりに自由になったのだ。

しかし、④になると同時に、母は⑤にもな^エっていった。

他界した父が焼き場で骨になったあと、母は田舎の広い駐車場で青空を見上げながらぼつりと言ったのだ。独り身になっちゃったな——、と。

「奈緒がそう言うなら、仔犬ちゃん、まだ返事をしないでおこうかな」

母の声で、わたしの心が過去から引き戻された。

「あ、うん、そうして。よく考えてから決めた方がいいと思うから」

「分かった。返事は先延ばしにする。でも、とりあえず明日、実際にどんな仔犬ちゃんなのか見せてくれるっていうから、仕事帰りに行ってみるよ」

「オッケー。仔犬ちゃん、スマホで写真を撮って、わたしに送って」

「うん、送るよ」

それで、仔犬の話は終わった。^⑦でも、なんとなくだけど、わたしのなかには、母は仔犬を飼うだろう、という予感があった。

「そういえば、今日は、そっちも、すごくいい天気だったでしょ？」咳を我慢するような声で母が言った。

「ほほ快晴だったよ。風は強かったけどね」

「今シーズンで、いちばん寒かったらしいじゃない？ ちゃんとあったかい服を着てる？」

母は、わたしのいる都会の天気までチェックしてくれているのだ。

「もちろん着てるよ。わたし、昔から寒がりだし」

「なら、いいけど」

「っていうか、風邪を引いてる人に言われたくないんだけど」

「あはは、そうだよね」

と笑って、母はまた咳き込んだ。

咳、か——。

かつて三人で暮らしていたあの家に、ぼつんと一人ぼっちでいるときに咳をしたら……、きつと、その音は、哀しいくらい大きく響くんだらうな。

もりさわあきお
森沢明夫『本が紡いだ五つの奇跡』より

※1 柳 … 人の心や行動を妨げるもの。

問一 二重傍線部A～Eのカタカナは漢字に直し、漢字には読みがなを「ひらがな」でつけなさい。

問二 波線部ア～エのうち、活用形の違うものを一つ選び、記号で答えなさい。

問三 傍線部①「飼うの、大変じゃない？」とあるが、このように言う「わたし」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 生き物を飼うことに責任が伴うのは当然だが、きまじめな母がその責任を背負いこみすぎてしまい、淋しさを紛らわすつもりがかえって苦しむことになるのを恐れて、犬を飼うことにそれとなく反対している。

イ 「わたし」は仔犬を飼うことの大変さを母よりもよくわかっており、父の介護から解放されたばかりで風邪まで引いている母には荷が重はずだと、犬を飼おうとしている母にそれとなく注意を促している。

ウ 仔犬を飼うことについて即断できずに迷っている母の様子からは、夫の介護から解放された今、また自分以外のものの世話をすることへの不安を見て取ることができ、その不安に遠回しに同意している。

エ ようやく父の介護から解放されたばかりなのだから、しばらくは自分以外のものよりも自分のことを考えて過ごしてもらいたいという気持ちがあり、母が犬を飼うことに対して遠回しに反対している。

問四 傍線部②「わたしは、そこで言葉を止めた」とあるが、その理由を説明したものととして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 親子とはいえ、年上の大人に対して諭すようにものを言うのは失礼だと感じたから。

イ 母が仔犬を飼いたがる理由に思い当たり、むやみに反対するのがためらわれたから。

ウ 母に仔犬を勧めた職場の人の気持ちを思うと反対するのは気がとがめるように感じたから。

エ 仔犬を飼うかどうかよりも、いかにも体調が悪そうな母の様子の方に気を取られたから。

問五 傍線部③「わたしは、何よりそのことが心配だった」とあるが、「私」はどんなことを「心配」しているのか。「く」を心配している。」に続くように、本文中の語句を用いて六十文字以内で答えなさい。

問六 空欄部 ④・⑤ に入る適当な語句を、④は二字で、⑤は五字で本文中から抜き出しなさい。

問七 傍線部⑥「よく考えてから決めたほうがいいと思う」とあるが、「わたし」がこのように「思う」のは、仔犬を飼う母についてどんな想像をしているからか。「くから。」に続くように本文中から四十文字以上四十五文字以内で抜き出し、その初めと終わりの各五文字を答えなさい。

問八 傍線部⑦「でも、なんとなくだけど、わたしのなかには、母は仔犬を飼うだろう、という予感があった」とあるが、この「予感」を説明したものとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 娘の忠告を受け入れるようなそぶりは見せているものの、もともと自分で決めなくては気が済まない頑固な母の性格から考えて、何かと理由を付けながら、結局は仔犬を飼うことにするのだろうと半ばあきらめている。

イ 娘の忠告に耳を傾けつつも、夫の介護から解放され、娘である「わたし」も社会人として自立している今、母は誰かに尽くしたいという気持ちを満足させるために、結局は仔犬を飼うことを選ぶだろうと思っている。

ウ 返事を先延ばしにするとはいえ、献身的に介護をした夫を亡くし、娘である「わたし」も都会で一人暮らしをしている今、母は一人でいることの淋しさを、結局は仔犬を飼うことで埋めようとするのだろう思っている。

エ 返事を先延ばしにするとは言っているものの、母のきまじめな性格から考えて、せっかく話を持ち掛けてくれた職場の人に気がねして、結局は何とかがして仔犬を飼おうとしようと考えている。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「昔、愚かなる俗※1あつて、人の婿になりて行きぬ。さまざまにもてなされけれども、なまござかしくよしばみて、いと物も食くはで飢うゑて覺ちよつと 上品ぶつぶつて 食くべないで

えけるままに、妻めが白地あからまに出でたる隙ひまに、米をひと頬ほほ打ちくくみて食はむとする所に、妻帰かへりたりければ、恥かかしさに面かほうち赤めてゐたり。

『頬ほの腫はれ給たまふと見え給たまふをばいかにや』と問①へばこゑもせず、いたよ 彌よ顔かほ赤みければ、腫物しゅぶつの大事だいじにて、ものも言はぬにやと驚あき、父母ぶふにかくますま

と云いへば、父母ふぼ来りて、『いかにいかに』と云ふ。弥々いよいよ色赤くなるを見て、隣りの者の集まりて、『婿殿むこどのの腫物しゅぶつの大事だいじにおはすなる、あさま

し』とて訪とらふ。さるほどに、『医師くすし呼べ』とて、藪※2醫師やぶいしの近々にありけるを呼びて見すれば、『ゆゆしき御おん大事だいじの物なり。とくとく療治れうぢし参ら

せん』とて、大きな火針ひばりを赤く焼きて、頬ほほを通したれば、ほろほろとこぼれてけり。頬ほほは破やぶられ恥はぢがましかりけり。』

『沙石集』より

※1 俗 … 僧でない一般の人。

※2 藪やぶ醫師 … あてにならない医者。

問一 波線部A「驚き」、B「恥はぢがましかりけり」の主語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア 婿 イ 妻 ウ 父母 エ 医師 オ 隣りの者

問二 傍線部①「問へばこゑもせず」を現代仮名遣いに改めて、すべて「ひらがな」で書きなさい。

問三 傍線部②「かく」とあるが、その内容として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 婿はたくさん食べる姿を妻に見られたのが恥ずかしくて、顔を赤くして黙りこくってしまった、ということ。
- イ 婿はお腹が空いていても、食べることを我慢してまで頬に腫物があるのを隠していた、ということ。
- ウ 婿の頬が赤く腫れてしまって、それが原因で何もしゃべることができない状態である、ということ。
- エ 婿は自分に隠れて食事をしている妻を恥ずかしく思い、あきれて何も言えなくなってしまった、ということ。

問四 にあてはまるものは何か、本文中から二字以内で抜き出しなさい。

問五 本文の内容と一致しているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 婿は妻の家で食事を振舞われていつもごちそうになっていたが、この日だけはあまり食べていなかった。
- イ 婿の頬は本当は腫れていなかったが、病気だと思われて近所の人が集まってくるほどの騒ぎになってしまった。
- ウ 妻の父母は婿の状態をあまり心配していなかったが、近くに住む人々に言われて医師を呼ぶことにした。
- エ 医師は婿の頬が赤く腫れている状態をそれほど大したことはないと判断して、不適切な治療を行ってしまった。